第 35 回
昭和医科大学学士会シンポジウム

新生児医療のパラダイムシフト

オンデマンド配信にて開催

2026（令和 8）年 8 月 22 日（土）～ 9 月 24 日（木）

第 35 回昭和医科大学学士会シンポジウム

新生児医療のパラダイムシフト

コーディネーター

昭和医科大学大学院医学研究科小児内科学分野　教　授　　水野　克己

1. 在胎期間 22 ～ 23 週で出生した生育限界児の管理と転帰：
   本邦における新生児管理の特徴　（25 ～ 30 分間）
   埼玉医科大学総合医療センター小児科　教　授　　難波　文彦

2. 周産期脳障害に挑む
   ～幹細胞療法が拓く新たな治療パラダイム～　（25 ～ 30 分間）
   名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター　センター長　　佐藤　義朗

3. DOHaD からみた新生児管理　（25 ～ 30 分間）
   昭和医科大学江東豊洲病院小児内科　准教授　　中野　有也

4. 母乳バンクの役割　（25 ～ 30 分間）
   昭和医科大学大学院医学研究科小児内科学分野　教　授　　水野　克己

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【開催】期間中下記 URL にて公開
2026 年 8 月 22 日（土）～ 9 月 24 日（木）
https://vimeo.com/showcase/12283071?fl=so&fe=fs
パスワード　20260822gakushikai
◆昭和医科大学学士会会員と昭和医科大学所属者向けの公開です.

1．在胎期間 22 ～ 23 週で出生した生育限界児の管理と転帰：本邦における新生児管理の特徴

埼玉医科大学総合医療センター小児科
教授　難波　文彦

在胎期間 22 ～ 23 週の超早産児（生育限界児）の管理は世界的に議論の多い領域である。本講演では、本邦における 22 ～ 23 週児の管理と転帰について、単施設経験および全国調査の結果を基に概説する。本邦では多くの NICU において 22 週児に対する積極的蘇生が実施されており、生存率は近年改善し、NICU 退院時生存率は 22 週で約 60%、23 週で約 80% に達している。これらの成績には単一の治療ではなく、複数の管理方法の組み合わせが関与していると考えられる。代表的な特徴的管理として、切断臍帯ミルキング、出生直後の気管挿管、急性期の従来型人工換気から高頻度振動換気への移行、頻回の新生児科医による超音波評価、急性期鎮静、プロバイオティクス投与、ルーチンのグリセリン浣腸などが挙げられる。これらの多くは十分なエビデンスが確立されているとは言えないものの、本邦の NICU において広く実践されている。近年は生存率の向上のみならず、神経学的後遺症を伴わない後遺症なき生存（intact survival）や家族の生活の質（QOL）を含めた長期転帰の改善が重要な課題となっている。22 ～ 23 週児の診療は、出生直後から長期フォローアップまでを含む包括的な診療戦略として捉える必要がある。

【ご略歴】

1999 年　3 月　岡山大学医学部医学科卒業
2002 年　1 月　－ 2002 年 6 月　国立病院岡山医療センター　新生児科
2002 年　7 月　－ 2004 年 6 月　大阪府立母子保健総合医療センター　新生児科
2004 年　7 月　－ 2005 年 3 月　国立病院岡山医療センター　新生児科
2005 年　4 月　－ 2009 年 3 月　大阪府立母子保健総合医療センター　研究所　免疫部門
（大阪大学大学院医学系研究科内科系臨床医学　連携大学院生）
2009 年　8 月　－ 2013 年 3 月　フィラデルフィア小児病院　新生児部門　ポスドク
2013 年　4 月　－ 2018 年 9 月　埼玉医科大学総合医療センター　小児科　講師
2018 年 10 月　－ 2023 年 6 月　埼玉医科大学総合医療センター　小児科　准教授
2023 年　7 月　埼玉医科大学総合医療センター　小児科　教授

【所属学会】

日本小児科学会、日本周産期・新生児医学会、日本新生児成育医学会、日本呼吸器学会、
Society for Pediatric Research、American Pediatric Society、International Perinatal Collegium

2. 周産期脳障害に挑む
～幹細胞療法が拓く新たな治療パラダイム～

名古屋大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター新生児部門・センター長
小児科・診療教授　佐藤　義朗

新生児低酸素性虚血性脳症（HIE）に対する低体温療法は標準治療として確立しているものの、特に重症例では効果が限定的であり、神経学的予後の改善には新たな治療パラダイムの導入が求められている。本講演では、幹細胞療法がもたらす新たな治療戦略を提示する。幹細胞は損傷細胞の置換のみならず、パラクライン効果を介した多面的作用、病変部位への指向性、環境応答性、神経・血管新生促進などの特性を有し、急性期から慢性期まで幅広い治療時間枠を提供し得る。我々はこれまでに、神経幹細胞、臍帯血幹細胞、骨髄単核球、間葉系幹細胞（臍帯・骨髄・脂肪由来）、Muse 細胞、乳歯歯髄幹細胞（SHED）を用い、基礎研究から臨床試験まで一貫した研究開発を進めてきた。亜急性期の Muse 細胞による治療開発では、HIE モデルで長期生着と機能改善を確認した。また、脳性麻痺モデルに対する SHED による開発では、症状出現後の慢性期投与にもかかわらず、神経新生の促進と運動・認知機能の改善を認めた。これらの非臨床研究成果を基盤として、Muse 細胞製品 CL2020 や自己 SHED を用いた医師主導治験・臨床試験が実施され、安全性と探索的有効性が示唆されている。本講演では、基礎研究から臨床応用への橋渡しの過程、これまでの臨床試験の成果、今後の臨床導入への展望を概説する。

【ご略歴】

1997 年　3 月　名古屋大学医学部医学科　卒業
1997 年　4 月　愛知県厚生連安城更生病院 研修医
1999 年　5 月　同　小児科医員
2000 年　4 月　神奈川県立こども医療センター新生児未熟児科 シニアレジデント
2002 年　1 月　長野県立こども病院新生児科 シニアレジデント
2002 年　4 月　名古屋大学大学院医学系研究科 小児科医員
2002 年 10 月　愛知県厚生連安城更生病院 小児科医員
2004 年　4 月　名古屋大学大学院医学系研究科健康社会医学系小児科学（博士課程）
(2006 年　1 月　愛知県コロニー心身障害者コロニー中央病院新生児科非常勤医 併任）
2007 年　4 月　Center for Brain Repair and Rehabilitation, Institute of Neuroscience and Physiology, University of Gothenburg, Sweden（博士）研究員
2009 年　4 月　名古屋大学医学部附属病院　周産母子センター 病院助教
2010 年 10 月　名古屋大学医学部附属病院　周産母子センター 助教
2013 年　7 月　名古屋大学医学部附属病院　総合周産期母子医療センター 新生児部門 講師
2022 年　7 月　名古屋大学医学部附属病院　総合周産期母子医療センター 新生児部門 病院准教授
2023 年　4 月　名古屋大学医学部附属病院　総合周産期母子医療センター 新生児部門 部門長併任
2024 年　4 月　同　センター長 併任
2025 年 10 月　名古屋大学医学部附属病院　小児科　診療教授併任

3. DOHaD からみた新生児管理

昭和医科大学江東豊洲病院小児内科
准教授　中野　有也

周産期医療の向上に伴い、本邦における早産・低出生体重児の救命率は飛躍的に向上した。しかしその一方で、早産・低出生体重児は遠隔期に成長障害や神経発達症のみならず、糖尿病、高血圧、慢性腎臓病などの non-communicable disease を将来発症しやすいことが明らかになってきた。こうした背景のもと、胎児期や生後早期の成育環境が生涯にわたる健康や疾病リスクを規定するという Developmental Origins of Health and Disease (DOHaD) 学説が注目され、長期予後改善のための新生児医療のあり方が重要視されるようになった。胎児期や生後早期の成育環境は臓器の発達やエピゲノム変化を介して個体の表現型に多大な影響を及ぼす。DOHaD からみた新生児医療の大きな柱は、適切な栄養管理やストレス軽減などを通して、望ましくない体質獲得を予防すること、すでに獲得した表現型に応じた個別化医療を実践することである。また、将来の疾病リスクに対する早期介入を可能にするため予後予測や早期発見の手法を確立することも重要な課題である。さらに将来的には一旦獲得した体質の書き換え”体質リライト”が可能となれば理想的である。本講演では、ヒト倹約表現型の臨床像や早産児の脳発達に関する最近の研究成果を紹介しながら、DOHaD の視点からみた今後の新生児医療の展望について発表する。

【ご略歴】

2003 年　昭和大学医学部卒業　昭和大学小児科学講座入局
　　昭和大学病院小児科　助教（員外）
2004 年　町田市民病院小児科
2005 年　昭和大学横浜市北部病院こどもセンター　助教（員外）
2007 年　千葉県こども病院新生児未熟児科
2009 年　昭和大学病院小児科　助教（員外）
2010 年　昭和大学病院小児科　助教
2017 年　昭和大学病院小児科　講師
2021 年　昭和大学江東豊洲病院小児内科　准教授　同　周産期センター　副センター長
2025 年　昭和大学→昭和医科大学に改称

【学会・学術活動】

日本小児科学会（専門医・指導医・代議員）、昭和医科大学医師会・幹事、
日本周産期新生児学会新生児（専門医・指導医・評議員）、
日本新生児成育医学会・評議員、日本 DOHaD 学会（代議員・理事）、
Journal of Developmental Origins of Health and Disease　編集委員、
臨床 DOHaD セミナー・代表世話人、小児成長研究会・幹事、
ハイリスク児フォローアップ研究会・常任幹事、NCPR インストラクター、
国際 SGA コンセンサスガイドライン作成メンバー

4. 母乳バンクの役割

昭和医科大学大学院医学研究科小児内科学分野
教授　水野　克己

超早産児にとって母親の母乳は、栄養学的・免疫学的観点から最も適した栄養源である。母乳に含まれる免疫グロブリン、成長因子、オリゴ糖などの生理活性物質は、未熟な腸管の成熟を促し、感染症や壊死性腸炎（NEC）の発症リスクを低減することが知られている。しかし、出産直後は母体の全身状態や乳汁分泌の確立に時間を要することも多く、十分な母乳が得られない状況は少なくない。その間、静脈栄養のみに依存すると腸管粘膜の萎縮や bacterial translocation のリスクが高まり、感染症や全身炎症の誘因となり得る。一方で、人工乳による早期経腸栄養開始は腸管透過性の亢進や腸内細菌叢の変化を介して NEC 発症との関連が指摘されており、慎重な判断が求められる。かつては「もらい乳」という慣習も存在したが、母乳は感染性体液であり、安全性の確保が困難であることから現代医療においては現実的ではない。こうした背景のもと、適切なドナー選定、殺菌処理、品質管理を経たドナーミルクを供給する母乳バンクの役割は極めて重要である。母乳バンクの整備は、母親の母乳が確立するまでの“ブリッジ栄養”として超早産児の腸管を守り、より安全で積極的な栄養戦略を可能にする基盤となっている。

【ご略歴】
1987 年　3 月　　昭和大学医学部卒
1993 年　4 月 ～ 1995 年 10 月　University of Miami, Jackson Memorial Hospital, Research Fellow
1995 年 11 月 ～ 1999 年 3 月　葛飾赤十字産院小児科　副部長
1999 年　4 月 ～ 2005 年 1 月　千葉県こども病院新生児科　医長
2005 年　2 月 ～ 4 月　西オーストラリア大学生化学教室　visiting fellow
2005 年　4 月 ～昭和大学小児科　助教授
2014 年　3 月 ～昭和大学江東豊洲病院小児内科　教授
2018 年　4 月 ～昭和大学医学部小児科学講座　主任教授

【学会・学術活動】
日本小児科学会・指導医
日本周産期新生児医学会　評議員・代議員
日本小児科学会・理事、日本周産期新生児医学会・理事、
日本新生児成育医学会・理事、日本母乳哺育学会・理事長

◆昭和医科大学雑誌◆

「昭和医科大学雑誌」（和文誌）および「The Showa Medical University Journal」（英文誌）は、J-STAGE（科学技術振興機構の電子ジャーナル出版プラットフォーム）にて、論文全文 PDF を公開しています.

昭和医科大学学士会ホームページ「学会誌」のリンクからも、J-STAGE 公開頁に入れますので、是非ご高覧ください.

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

◆「昭和医科大学雑誌」＜特集＞のご案内◆

第 86 巻 3 号（2026 年 6 月号）掲載

テーマ　【昭和医科大学病院におけるがんゲノム医療の標準化と新展開】

巻頭言：小島 康幸 准教授　　昭和医科大学臨床ゲノム研究所

1. ゲノム解析から見た現在のゲノム医療における課題と将来像
   ～遺伝性腫瘍を中心に～
2. 造血器腫瘍におけるがんゲノム医療の新展開と今後の診療
3. 泌尿器科腫瘍におけるがんゲノム医療と遺伝性腫瘍への対応
4. 婦人科腫瘍における診療実績と遺伝性腫瘍への対応
5. 膵胆道癌におけるがんゲノム医療の現在と展望
6. 肺がん、原発不明がん、肉腫におけるがんゲノム医療の実践と今後の展望

第 86 巻 5 号（2026 年 10 月号）掲載

テーマ　【富士吉田教育部における〈優れた医療人育成〉のための初年次教育最前線】

巻頭言：小川 良雄 特任教授　　昭和医科大学富士吉田教育部

1. 学修と情報の基礎づくり ー「アカデミックスキルズ」と Micorsoft Teams の導入ー
2. 初年次教養教育の現状と課題 ー学部連携科目と選択科目ー
3. 「医療サイエンス科目」の新たな取り組み ー新新カリキュラムへの対応と展望ー
4. 「初年次体験実習」の新たな挑戦 ーコロナ禍後の再構築にむけてー
5. 教育としての〈全寮制〉と〈課外活動〉

【昭和医科大学学士会ホームページ：学会誌】

◆第73回昭和医科大学学士会総会　開催案内◆

会　　期：2026 年 11 月 28 日（土）　昭和医科大学 4 号館
　　年次報告，教育講演，一般演題・学位論文内容発表
演題募集：2026 年 9 月 1 日（火）～ 9 月 18 日（金）
【教育講演】
1.「デジタル医学が拓く脳神経外科の未来 ～ AI と最先端デバイスの臨床実装～」
　佐藤 洋輔　教授　　昭和医科大学脳機能解析・デジタル医学研究所
2.「薬物投与の最適化を目指したドラッグデリバリーシステムの進歩と将来の展望」
　勝見 英正　教授　　昭和医科大学大学院薬学研究科製剤設計学分野
3.「変革期の全寮制教育 ～持続可能な運営と教育的価値の再確認～」
　山本 雅人　教授　昭和医科大学富士吉田教育部

【教育講演】は会場から Live 配信（Zoom）も行う予定です．
配信につきましては、11 月上旬頃に学士会 HP 上に申込先を掲載いたします．

昭和医科大学学士会ホームページ
https://www10.showa-u.ac.jp/~gakushikai/gakushikai.html

昭和医科大学学士会
〒142-8555　東京都品川区旗の台 1-5-8　昭和医科大学内
Tel.　03-3784-8074　Fax.　03-3784-7444